

サイト・トランスレーション研究の可能性

長沼美香子・船山仲他(神戸市外国語大学) 稲生衣代・水野的(青山学院大学)
石塚浩之(広島修道大学) 辰巳明子(広島商船高等専門学校)

1. はじめに

サイト・トランスレーション(sight translation、以下サイトラ)は通訳でも翻訳でも使われる特殊な訳出技法であり、通訳と翻訳をつなぐ言語活動でもあるという性格をもっている。サイトラ自体の研究はいまだに少ないため、その研究が重要であることは論を俟たないが、それは同時に、いわゆる「訳読」の問題や最近注目されている TILT(Translation in Language Teaching)にも関連する問題を含んでいる。また「訳さない」と「訳せない」は、まったく異なる。例えば外国語を理解するときに、いつも母語に「訳す」必要はないが、それは「訳せない」ことの言い訳にはならないだろう。サイトラは、このような問題を考える上でも有効な枠組みのひとつになると思われる。このような趣旨の下、幅広く深くサイトラの可能性について研究するため、2015 年度に「サイトラ研究プロジェクト」を発足させた。

初年度は通訳・翻訳・英語教育などの観点から、サイトラに関する多角的な基礎研究と応用研究の可能性を模索し、計 3 回の研究会を実施した。本稿は、この研究会の活動記録でもあり、6 人のメンバーがそれぞれ、研究会での発表内容から発展した考察をまとめたものである。なお第 2 回研究会は公開研究会として、神戸市外国語大学に隣接の大学共同利用施設 UNITY セミナー室で開催した。

本稿の各節の構成は次の通りである。第 2 節および第 3 節は、第 1 回サイトラ研究会(2016 年 1 月 24 日)からの成果であり、長沼が「サイトラ・AVT・SFL」、石塚が「テキストの現前: サイトラの認知的研究の持つ意義」というテーマで論じる。第 4 節および第 5 節は、第 2 回サイトラ研究会(2016 年 3 月 20 日)に基づき、船山が「サイトラにおける概念化のステップ」、水野が「順送りの訳・翻訳・訳読」というテーマで論じる。第 6 節および第 7 節は、第 3 回サイトラ研究会(2016 年 6 月 26 日)の内容に依拠し、辰巳が「英語教育におけるサイトラについて」、稲生が「通訳訓練におけるサイトラ」というテーマで論じる。

2. 字幕とサイトラ: SFL を応用したテキスト分析

サイトラ研究プロジェクトの初会合では、サイトラの基本的特徴をメンバーで共有することから始まった。本節ではまず、この点を簡単に確認する。次に、「視聴覚翻訳 (Audiovisual Translation)、以下 AVT」と「選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics)、以下 SFL」の基本も参照しながら、筆者の問題意識を提示する。そして最後に、事例研究として字幕言語のテキスト分析を試みる。これまでのサイトラに関する文献において、この 3 つのキーワード「サイトラ・AVT・SFL」を視野に入れた先行研究は、管見の限りない。

2.1 主な先行研究のキーポイント

2.1.1 サイトラについて

Čeňková (2010) の言葉を借りれば、サイトラの特徴は「書記言語から音声言語への転移」として、「自然な口述での産出を、適切な速度で、即座にかつ滑らかに行うことが期待される」というものである。同時通訳とは異なり、通訳者が自分のペースで訳出できるが、いつもテキストが眼前にある(語彙干渉のリスクが増加し、起点テキストの構造に引きずられる)ので、認知負荷が高いとも言える。サイトラの基本的なプロセスは、「起点言語の形式を理解・分析・脱言語化 + 作動記憶において起点言語の内容を処理・貯蔵 + 目標言語の産出」(Agrifoglio 2004; Gile 2002)から構成される。そして、起点テキストを読みながら同時に発話するという「注意の分割」が要請される(Lambert 2004; Viezzi 1989, 1990)。

通訳訓練としてのサイトラの有用性を論じた Viaggio (1992) は、通訳者にとっても翻訳教育は欠かせないものであり、特に同時通訳の訓練としてサイトラが最も効果的であると説く。同時通訳もサイトラも起点テキストの全体を見通すことなく、訳出をしなければならない点が共通項として挙げられている。

しかしながら、このような見解とは異なる見方もある。それは Viezzi に代表される意見で、サイトラと同時通訳とは決定的に異なるとする。入力が書記テキストか音声テキストかという違いがあるし、サイトラでは起点テキスト全体が与えられて音声入力がなく、テキスト前後の確認が可能となることなどが指摘される。

だが Viaggio は、Viezzi の挙げた相違点こそがサイトラの利点であると反論する。つまり、サイトラでは同時通訳よりも訳出に集中できる(まずはゆっくりとでも正しくできることが訓練段階では重要)。そしてサイトラの意義は、「訳出に口頭発話の自然さを融合すること」にあり、表現の自然さとオラリティとの関係が強調されるのである。

2.1.2 AVT について

Díaz-Cintas (2010) によれば、AVT の特徴は「視覚チャンネルと聴覚チャンネルを介した異種記号の同時発生」である。Pérez-González (2014) は、AVT がカバーする 3 つの主領域として、「字幕」「リボイシング(吹き替え、ボイスオーバー、同時通訳など)」「支援的 AVT(難聴者用字幕など)」を挙げている。

字幕の特徴を確認しておこう。モードとしては、音声言語の起点テキストから書記言語の目標テキストへの変換となる(サイトラとは逆方向)。オリジナル音声とオリジナル映像がそのまま

視聴されるため、字幕はこれらと同期する必要がある。

周知のように、字幕は時間的にも空間的にも制約された翻訳である。欧米では「6 秒ルール」(1 行あたりアルファベット 35 文字の 2 行を 6 秒で読ませる)、日本では「1 秒 4 文字ルール」(ちなみに 1 行あたり日本語 12 文字であれば、2 行で 6 秒となるので、「6 秒ルール」とも整合)を慣習とする(確固たる根拠はないが)。字幕の言語的側面としては、前の場面(ハコ)への戻り読み不可(とりわけ劇場の場合)であり、そして各ハコが自己充足して首尾一貫した論理的な統語単位となるのが望ましく、つまり音声(起点テキスト)の統語構造と字幕(目標テキスト)との同期が理想(とりわけ起点言語が英語である場合、多くの視聴者が理解できるため、なおさら)となるなどが挙げられる(Díaz-Cintas 2010)。

2.1.3 SFL と AVT に関する先行研究

字幕を含む AVT における言語資源を対象として、SFL の手法を用いてテキスト分析をした研究はきわめて少ない。Espindola (2012) は、字幕における文化要素の伝達に関して、同化的翻訳と異化的翻訳(Venuti)、文化表象(Hall)、悪態的字幕(Nornes)などの先行研究に触れた後に、SFL による字幕言語テキスト分析の重要性を強調する。そして、字幕という意味生成資源(the meaning making resources of subtitling)の特徴は、起点テキストの音声モードから目標テキストの書記モードへの変換であり、起点・目標テキストにおける 3 つのメタ機能(ideational, interpersonal, textual)を比較する意義を論じるが、具体的なテキスト分析には及んでいない。

以上の点を踏まえて、「サイトラ・AVT・SFL」の接点を探る。

2.2 字幕言語テキスト分析

字幕言語の特徴をテキスト形成的メタ機能(textual metafunction)、文法的錯綜性(grammatical intricacy)という点で分析してみよう(Halliday and Matthiessen 2004)。事例 1~3 は、起点テキストとして独立メディアの報道番組「デモクラシー・ナウ!」のSCRIPT(<http://democracynow.jp/>)を使用し、目標テキストは筆者の試訳である。

2.2.1 テキスト形成的メタ機能に注目

テキスト形成的メタ機能のなかで、ここでは Theme-Rheme 構造に焦点を当てる。事例 1 の 1-2 の字幕では、旧情報である the response「反響」が省略されており、字幕 1-1 と 1-2 の組み合わせで Theme-Rheme を構成していることになる(表 1 と 2 とともに下線部が Theme)。事例 2 の 2-1 では、起点テキストにおける Theme である fossil fuel divestment「化石燃料への投資撤退」は、このテキスト全体の主要なトピックであり、旧情報になるので、字幕においては訳出されていない。このような事例から、字幕の Theme-Rheme 構造の特徴が浮かび上がる。それは、字幕のプロセスで何を省略するのかという翻訳方略の理論的裏付けとなる。

【表 1】事例 1

	タイムコード	起点テキスト	目標テキスト(字幕)
1-1	00:58:22,053 --> 00:58:23,942	A: And <u>the response</u> ?	<u>反響</u> は？
1-2	00:58:23,943 --> 00:58:26,029	B: <u>The response</u> has been overwhelmingly positive.	すごく好意的です

【表 2】事例 2

	タイムコード	起点テキスト	目標テキスト(字幕)
2-1	00:48:57,426 --> 00:49:05,372	<u>Fossil fuel divestment</u> means taking your money out of investments in fossil fuels and instead putting it into more socially responsible companies.	化石燃料の企業から資金を引きあげ 社会的責任を果たす企業に回します

2.2.2 文法的錯綜性

事例 3 の起点テキストは 3-1 と 3-2 で長い 1 文を構成し、話し言葉に顕著な文法的錯綜性を呈している。このような起点テキストを字幕翻訳する行為では、情報構造を分析したうえで、「順送りの訳」で前から訳出する必要がある。そうしないと、字幕と映像・音声が入り混じり、視聴者の理解に支障が出る。

【表 3】事例 3

	タイムコード	起点テキスト	目標テキスト(字幕)
3-1	00:56:06,906 --> 00:56:20,335	And I think it shows something pretty significant, that the administration top decision makers at Harvard really fear serious engagement with this issue and talking about the impacts of their investments in the fossil fuel industry,	大学トップの意思決定機関は 私たちの真剣な取り組みを恐れて 化石燃料業界への投資の影響を 話したがりません
3-2	00:56:20,336 --> 00:56:33,450	to the extent that they would rather have us shut down buildings, disrupt administrative proceedings, create sort of a huge media storm around this issue, rather than seriously engage with us.	私たちに建物を封鎖させ 事務を妨害させて それをマスコミが騒ぎ立てても 面と向かって関わろうとしません

2.3 まとめ

サイトラに関する学術研究は少なく、特に日本語と英語のペアにおいては限定される。これ

までのサイトラ研究の論点としては、通訳訓練のひとつという位置づけが主たるものだが、他の可能性はないのだろうか？

近年の AVT 研究の台頭は著しいが、AVT 研究では文化的側面が注目される傾向にあり、言語学的なテキスト分析は希少である。そこで本節では、SFL の観点から字幕言語テキストの分析を試みた。

サイトラでは文字→音声というモード変換となり、他方、字幕翻訳では音声→文字という反対方向のモード変換が行われる。そのために、サイトラと字幕は一見すると無関係のように思われがちだ。しかしながら字幕では、映像や音声と同期するために「順送りの訳」が要請され、かつ自然なオラリティも考慮しなければならない。ここにサイトラと字幕との接点がある。そして、産出された字幕言語テキストの分析方法としては、SFL が提示する概念(例えば、テキスト形成的メタ機能、文法的錯綜性など)が役に立つ。

3. 同時通訳の認知的構成と要素訓練

3.1 はじめに

本節ではサイトラの諸側面(本稿第7節参照)のうち、同時通訳の要素訓練の一つとしての側面に注目し、この訓練法の有効範囲について考察し、その不足を補う訓練法として同時通訳と逐次通訳の中間形態ともいえる細分逐次通訳の導入を提案する。

3.2 要素訓練としてのサイトラ

サイトラと同時通訳を比較した実証研究としては、Viezzi (1989, 1990)、Lambert (2004)、Agrifoglio (2004) がある。いずれも A 言語への訳出のみを扱っているが、サイトラの同時通訳訓練に対する有効性について見解は異なる。3 者はそれぞれ異なるパラメータを使用しており、同一の尺度から研究結果を比較することは難しい。しかし、いずれもサイトラと同時通訳の認知モードの差異に注目し、2 者が性質の異なる作業であることを認めている。なかでも Agrifoglio (2004) は、サイトラにおいては書記言語によるテキストが常に眼前にあることが作業上の障害になると主張している。Shreve, Lacruz and Angelone (2010) は、アイトラッキングを用いた実験でサイトラと書記言語への翻訳を比較し、Agrifoglio (2004) の主張に同意している。

上記の先行研究において、共通して言及されているのが、サイトラと同時通訳の入力モードの違い、すなわち、サイトラの入力が文字情報として視覚的に取得されるのに対し、同時通訳の入力が音声である点である。ここで問題となるのは、音声と視覚の認知モードの違いだけではない。書記言語は単なる音声言語の書き起こしではなく、独自の特徴を備えた言語体系である。情報密度、テキスト構造など、書記言語独自の言語的特徴がサイトラに特有の困難を引き起こしている可能性もある。また、文字情報の入力には被訓練者が自分のペースで進めることができるのに対し、音声情報の進行は聞き手の制御の及ぶところではない。同時通訳とサイトラの情報入力方式の違いは、同時通訳の要素訓練としてのサイトラの有効範囲を画定する要因となる。

3.3 細分逐次通訳

ここで音声入力による要素訓練として細分逐次通訳を提案する。この訓練は録音教材の用を想定しており、通常のスピーチの録音を加工することで同時通訳導入のための教材とするものである。具体的には、同時通訳の起点発話 (source utterance: SU) をあらかじめ訳出可能なチャンクに細分化し、被訓練者が目標発話 (target utterance: TU) を訳出するための無音部分を設けておく。これにより、被訓練者は入出力の同時性という困難を回避し、ペース制御の不可能な音声入力をチャンクごとに順送りで理解・訳出するスキルの強化に専念することができる。以下の図 1 は、同時通訳の SU と TU の時間的対応を模式的に示したものである(実際の訳出から取得した音声波形ではない)。

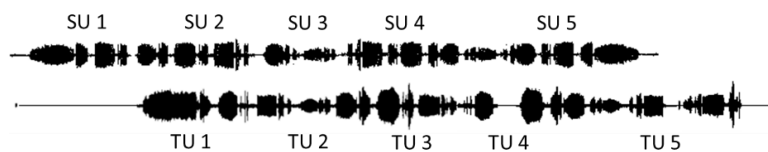


図 1: 同時通訳における SU と TU の対応

同時通訳においては SU 1 の訳出 TU 1 は SU 2 の聴取と同時に成される。同様に図 2 は細分逐次通訳の SU と TU の時間的対応関係を示している。SU の録音はあらかじめ訳出可能なチャンクに分割されており、被訓練者は SU 1 と SU 2 の間の無音部分に TU 1 の訳出を行う。この際、TU は通して聞いた場合に不自然にならないよう指示する。

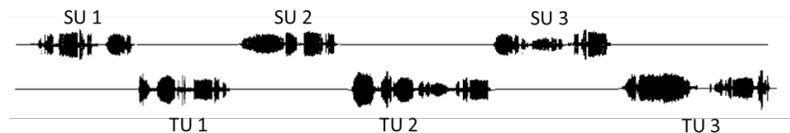


図 2: 細分逐次通訳における SU と TU の対応

細分逐次通訳においては入出力ともに音声であり、音声言語と書記言語の違いによる作業方式の違いはない。これにより、サイトラでは鍛えることのできなかつた要素の訓練が可能となることが期待される。被訓練者のレベルにより、チャンクの大きさや無音部分の長さを調節することもできよう。

3.4 訓練法の比較

サイトラおよび細分逐次通訳の意義を同時通訳の認知的特徴から検討する。認知的活動としての同時通訳プロセスにどのような構成要素を含むかは、研究上の立場や目的に応じ、さまざまなモデル構築が可能である。本稿では、同時通訳訓練法としてのそれぞれの訓練法の有効性を検討するため、入力モード、出力モード、訳出ペースの制御、並行作業、分節化、順送りの理解、順送りの訳出の 7 項目からサイトラの特徴を捉える。このうち、出力モード (音声)、

順送りの理解・訳出については、いずれの訓練法においても同時通訳と共通している。したがって、音声の訳出で順送りの理解・訳出のスキルを強化するという目的に関しては、2つの訓練法間の差異はなく、それぞれ有効であると考えられる。2つの訓練法の差異はこれ以外の4つの特徴から検討することになる。表1はこの4つの特徴から同時通訳と2つの訓練法を比較したものである。

	入力モード	訳出ペースの制御	並行作業	分節化
同時通訳	音声	不可	要	要
サイトラ	文字	可	要	要
細分逐次通訳	音声	不可	不要	不要

表1:同時通訳と3つの訓練法の比較

表1に整理したとおり同時通訳とサイトラは、並行作業と分節化の2つの特徴は共有しているが、入力モードと訳出ペースの制御の2点においては差異がみられる。特に訳出ペースについては、サイトラの場合、被訓練者が決定するため、作業速度が極端に遅くなる場合もある。同時通訳訓練法としてのサイトラの意義は、並行作業と分節化のスキル強化にあることが確認できる。

一方、細分逐次通訳はペース制御不可の状態音声入力情報の処理を行う点で同時通訳と特徴を共有している。同時通訳との違いとしては並行作業と分節化が不要である点あげられる。平行作業が不要であるため、被訓練者は努力 *effort* (Gile 1995) の管理よりも順送りの理解・訳出に集中することができる。また、あらかじめ訳出可能なチャンクに細分化された教材が与えられることで、どの程度のチャンクであれば訳出が可能であるかを体感することもできるだろう。分節化には通訳者の個人差もあるが、被訓練者へのモデルケースの提示には教育的意義があるであろう。

同時通訳の訓練として、従来のサイトラに加え細分逐次通訳を導入することにより、表1の4つの要素をすべて訓練することができる。各要素の難易度と重要性を考慮し、段階的に要素訓練を配置することで、より合理的な訓練プログラムを構成することができる。

3.5 まとめ

同時通訳の構成要素を分解して考えることにより、導入訓練としてのサイトラが同時通訳のどの要素の強化を目的としているかを明確化できる。サイトラの訓練目的は、並行作業と分節化の強化にあるが、入力モードと訳出ペースの制御という条件からは別の要素訓練が求められる。本節ではサイトラの不足を補う訓練法として細分逐次通訳を提案した。

それぞれの要素訓練が同時通訳のどの要素を目標としているのかを具体化することにより、より合理的かつ効率的な同時通訳教育を実現できる。サイトラ、細分逐次通訳のいずれも、分節化、順送りの理解・訳出といったスキルの強化訓練となる。こうした有効性は、専門的な同時通訳訓練という領域を離れ、英語教育一般における通訳訓練の活用の可能性につながる。その場合、音声での訳出は、訓練者および被訓練者がこれらの活動をモニターする手段とし

て位置づけられるであろう。

4. サイトラにおける概念化のステップ

4.1 手話通訳と同時通訳とサイトラ

手話も記号であるが、音声言語よりも概念化が高まっていると考えられる。日本語における「私」、「僕」、「俺」などが英語では“I”に相当する、という捉え方は“一人称”という概念に支えられる、と考えるならば、手話における一人称表現も同様に“一人称”という概念に支えられる。手話通訳が同時通訳のタイミングで行われることは示唆的である。

サイトラの所要時間を短縮し、同時通訳に近づける可能性は、作業を概念化のレベルまで深めることによって高まると考えられる。

4.2 形式と意味の対応

ソシュール以来、記号を形式と意味の二側面で捉えることが一般的になっているが、“意味”は形式のように固定しているものではない。ある発話に生起する1つの形式が表す意味は文脈に依存するし、その際に選択肢として候補にあがる意味さえ固定したリストを構成するわけではない。サイトラのように時間的制限を受ける言語行為における意味の処理者は、単語の潜在的意味の境界を超える概念、あるいは複数の単語の潜在的意味を結びつけるような概念を形成することを視野に入れるべきであろう。

発話産出において言語形式よりも意味(言いたいこと)が先に脳内に発生することは直感的に把握しやすいが、発話理解において形式と意味の時間的関係は意識しにくい。日常的意識としては、形式(単語など)の認識と伝達意味の認識は同時に発生するように感じられることもある。また、理解者の脳内で短期的に記憶されるのが形式であるのか意味であるのかは内省しにくい。しかし、誰かの発言を逐語的にすべて記憶していることは普通の状況では無い。伝言ゲームなどの経験でも確かめられるように、聞き取った発話で使われた形式を完全にそのまま記憶して繰り返すことは極めて難しい。他方、話し手の意図を記憶することは比較的容易である。そのような経験から、普通のコミュニケーションでは、形式を受け取った聞き手が、相手の意図した意味を理解したと思った後は形式に関する記憶は薄れていくと考えられる。特定の表現にこだわる必要がある場合に表現そのものが記憶に残るのは例外的な場合だと考えれば、意味を復元した後の形式は通常のコミュニケーションでは重要ではない。

サイトラにおいて、起点テキストが視野に入り続けているからと言って、言語形式を意識し続けることは通常のコミュニケーションのプロセスに反することであり、少なくとも、同時通訳の前段階としてのサイトラとしては、形式の保持に役割を持たせることを当然視する必要はないであろう。

4.3 文法概念の分離・保持・統合

名詞、動詞などの品詞や主語、目的語などの文法概念は文中での単語の役割に関わる。発話理解において、各単語が表現する語義が時間軸上で順に処理されるに際し、文法概念はその場で処理されるだけでなく、語義から分離されて保持され、別言語に通訳翻訳される

際には、複数の単語から出てきた文法概念が統合されることもある。たとえば、John hit a ball という情景描写を音声的に聞いた場合、聞き手は、hit が他動詞である可能性を脳内で参照し、次にその目的語が来るはずだという文法概念を抽出し、保持する。そして、その期待が次に出てきた a ball によって満たされると判断すると、動作主(John)が対象(a ball)を“打った”という関係が理解できる。日本語では「ボールを打った」というような格助詞と OV(目的語—動詞)という順序によって表されるこのような文法関係の概念は、“打つ”という個々の単語の語義から分離されて他動詞性という一般化された文法概念として認知されると考えられる。

単語の概念的側面が形式から分離することは、言語理解における多義性の解消にも現れる。たとえば、「騒ぐ」という形式が表す意味は生起する環境に依存する。

- (1) a. 子供が騒いだ。
- b. マスコミが騒いだ。
- c. 胸が騒いだ。

(1a)の場合、「子供が」を読んで、あるいは聞いて、子供についての話が続くことを予想する際に、“コドモ”という音形を保持するよりも、現実世界の中の子供像を想起する方が理解が早くなると考えられる。これは内省に基づく判断であるが、たとえば、聞こえた音が「トモレッチが・・・」であると、「トモレッチ」という音形そのものを記憶しておくしかないと比べると、「子供」についての知識がある場合の「子供が・・・」の記憶は内容が豊かで、かつその想起は容易である。(「トモレッチ」は筆者が勝手にここで作り上げた音形であり、それが指示する内容は筆者の頭の中にもない。)この文脈で「騒いだ」が続くと、大きな声や物音を立てている子供の姿が目に見えよう。

同様に、(1b)の場合、「マスコミ」を聞いた段階で何らかのイメージがすぐに想起されるはずであり、この文脈における「騒ぐ」の意味もそれによって限定されると考えられる。

(1a)や(1b)に比べて、(1c)の「胸」は臓器、心、感情の出所など、単独ではイメージしにくいので、「ムネ」という音形のまま保持する必要性が高い。後続の「騒ぐ」によって「胸」の意味が絞られる。上で例示した「トモレッチ」は極端な例であるが、それに比べて「胸」は語彙的には一般的に既知であろうから、ある程度の予想は可能であろう。抽象度において「胸」は「子供」と「トモレッチ」の中間と言えるだろう。このように、多義性の解消プロセスには概念化が深く関わっている。サイトラにおいてもこの側面に注目したい。

「騒いだ」という形式は同じでも、それぞれの例文で想起される状況は異なる。一般的に、翻訳・通訳について言われることであるが、先行する文脈に隠れている概念に注意をする必要がある。つまり、概念的な絞り込みは形式の境界を越えて実現する。サイトラにしても、時間的制約を受ける中で順調に翻訳を進めるためには、頭の中に先行文脈の情報を残さねばならない。そして、最も計算量の少ない先行情報参照は概念レベルにおいて実現すると考えたい。サイトラ作業においては、この点が作業時間に現れる。つまり、先行する単語の形式を復唱しながら当座の言語表現との絡み合いを頭の中で計算するよりも、先行情報をすでに概念化している方が即座の判断ができる可能性を高める(早める)。言い換えれば、概念化が並行して

進んでいなければ、サイトラが話す速度に追いつかない可能性が高まる。そのような点で、概念化のレベルでどのような作業が進んでいるかを見る必要がある。

4.4 語彙概念の分離・保持・統合

1つの文が表す概念を分離したり統合したりすることができる。たとえば、(2)の英語表現が表す概念の内容を(3)のように、日本語では異なる形で語彙化することができる。

(2) The dog ran into the house.

(3) a. 犬は走って 家に入っ た。

① ② ③

b. 犬は家の中に 駆け込ん だ。

①+② ③

つまり、(2)において ran into 表されている概念を①動作+②移動+③過去に分離すると、(3a)では、①動作は「走って」によって、②移動は「家に入っ」で表されている。他方、(3b)では、①と②(の一部)が「駆け込ん」で表されている。因みに、この表現方法(b)はフランス語表現(4)に近い。

(4) Le chien est entré dans la maison.

(Slobin 2003:162)

③ ①+②

このように、1つの事象とその言語表現の間に表現の選択を支える概念化のレベルがあるとすると、言語内でも言語間でもその構成には複数の可能性があることになる。文法概念だけではなく、いろいろな概念要素が表現を支えているとすると、翻訳においてもそのような概念レベルを考慮することによって翻訳過程に柔軟性を与えることができる。サイトラにおいてもそのような柔軟性を活用したい。

4.5 まとめ

言語表現を支える概念レベルに目を向けることはサイトラにおける工夫の幅を広げることになる。それは、翻訳時間の短縮にもつながり、サイトラだけではなく、同時通訳一般が受けるような時間的制約一般に対処することにも役立つと考えられる。

5. サイトラ:情報構造の視点から

5.1 これまでの研究の問題点

サイトラについては、これまで様々ならえ方がされてきた。先行研究をレビューする余裕はないが、統語的差異と短期記憶(作動記憶)の制約という要因を取り上げた研究は少ない。Agrifoglio (2004)はこの要因に触れた数少ない論文のひとつである。Agrifoglio はたとえば「言語間の統語的差異は通訳者がある情報が目標言語スピーチの適当な個所に挿入できる

までその情報を記憶に保持せざるを得ないようにするかもしれない」、「サイトラは情報を文の冒頭、あるいは、すでに訳し始めた部分から情報を検索するために短期記憶に依存しなければならない。特に二言語間で文法構造が大きく異なる場合にはそうである」という。しかし具体的な分析はない。

5.2 サイトラと「順送りの訳」

サイトラと順送りの訳は同義ではないが、サイトラを順送りの訳によって実現できれば通訳者 (sight translator) への認知負荷は少なくてすむ。順送りの訳とは構造的に異なる言語間のサイトラにおいて過負荷を生まないための訳出方略である。しかしそのことはスラッシュ・リーディングに関する一部の理解に見られるような、何でも前から順番に訳して行くことを意味しない。語順を転倒させなければ極めて不自然になる文は多いのだ。

5.3 「順送りの訳」と作動記憶

ここからは英語から日本語へのサイトラに限定して考える。一般に文をスラッシュで区切って順番に訳せば翻訳としては通用しない訳になる。それは理解をそのまま言語化しただけであろう。逆に英語のシンタックスをそのまま日本語に転移しようとするれば、通訳者にとっては極めて負荷の大きい作業になってしまう。サイトラはこれとは違い、時に語順の逆転を含みながらも、日本語の文法と文体が許す限り句順、節順に訳して行き、出来上がった訳文は翻訳として通用するものでなければならない。

5.4 文法構造と情報構造

言語によるコミュニケーションにおいては、話し手や書き手は単に基本的な統語構造や認知的意味だけでなく、情報のダイナミクスや情報の構造 (information structure) に注意すべきである。情報の流れをコントロールするのは、語順 (word order) によるテキスト方略である。したがってサイトラも通訳も翻訳も、情報構造に留意すべきである。形式と機能は意味を生み出すからである。Firbas (1999)は文の機能的構成(FSP)(広義の情報構造)と翻訳について次のように述べる。

書かれた文の機能的構成は書き手のコミュニケーションな目的を伝え、明らかにする。したがって翻訳者はオリジナルの構成 perspective を正しく解釈し、それを表現するための十分な手段を見つけなければならない。このことは、オリジナルで使われている文法構造とは異なった構造を使う必要があることを意味するかも知れない。(…)しかし、オリジナルの機能的構成を正確に提示できなければ、オリジナルの重要な情報を違った風に見せてしまうことにもなりかねないのだ。

de Vasconcellos (1992) の場合は、文法構造と情報構造の関係についてより明確に述べる。

Dik (1980)は主題と情報(構造)が言語からは独立した構成素の選好順序を決めると述

べた。もし翻訳においてこの順序をシンタックスからの逆方向の圧力に抗して尊重すべきであるなら、その時はシンタックスが折れなければならない。

つまり、言語コミュニケーションでは語彙と統語構造から生まれる意味に情報構造から生まれる意味が重なる(これに語用論的意味が加わる)のだが、サイトラにおいては統語構造から生まれる意味を把握したうえで、情報構造を維持しなければならない。言い換えれば、目標言語(訳)は情報構造を反映したものでなければならない。

情報構造はそもそも受け手(読者、聴者)の側の理解しやすさという考慮に発している。情報構造は語順に基づくテキスト方略であるから、情報構造を目標言語で再現するには、起点言語の語順(句順、節順)をできるだけ維持すればよいことになる。

英語でも次のような構造であれば統語構造と情報構造をほぼそのまま日本語に転移できる。

(1) For those on the receiving end (2) the experiment was sometimes bewildering, (3) far from wholly successful, (4) but nevertheless of profound and lasting significance.

(1) 受け手の側にとっては、(2) その実験は時に当惑させられるものであり、(3) どうも全面的に成功しているとは言えないものであった。(4) しかしそれにもかかわらずそれは深く永続する意味をもっていた。

しかし次のような文の場合、統語構造を再現しようとするすると翻訳者の翻訳作業の負荷も、読者の理解の負荷も、作動記憶の容量を越えてしまう。

(1) The relief workers (2) say (3) they don't have (4) enough food, water, shelter, and medical supplies (5) to deal with (6) the gigantic wave of refugees (7) who are ransacking the countryside (8) in search of the basics (9) to stay alive.

文法構造を再現しようとした訳例

(1) 救援担当者たちは、(9) 生きるための (8) 食料を求めて (7) 村を荒らしまわっている (6) 大量の難民たちの (5) 世話をするための (4) 十分な食料や水、宿泊施設、医薬品が (3) ないと (2) 言っています。

ここで、以下のような順送りの訳を採用すれば両者の負荷が大幅に低減でき、さらに情報構造を再現することになって理解しやすさも大きく改善する。

(1) 救援担当者たちの (2) 話では、(4) 食料、水、宿泊施設、医薬品が (3) 足りず、(6) 大量の難民たちの (5) 世話ができないとのこと。 (7) 難民たちは今村々を荒らしまわって、(9) 生きるための (8) 食料を求めているのです。

5.5 サイトラの方略の開発と翻訳の方法

ただ「前から順に」、「意味の単位でスラッシュを入れて」というのではなく、この場合はこう訳す(訳せる)という指針を与えられるように、サイトラの方略を開発すべきである。そのためには情報構造に関する理論と作動記憶の理論が役に立つ。情報構造の理論はたんに旧情報と新情報、主題(Theme)－題述(Rheme)、機能的文構成(FSP)などの理論だけでなく、背景と前景、知覚の順序、際立ち(あるいは重要性)と焦点(Focus)、主節の格下げなどの理論を取り入れ、統合する必要がある。この情報構造の理論と作動記憶の理論を結びつけることによってサイトラの方略が生まれてくる。

5.6 翻訳の方法

その方略はほとんどそのまま(きわめて妥当な)「翻訳の方法」でもあるだろう。情報構造を優先する順送りの訳が、翻訳者(通訳者)だけでなく翻訳の読者(通訳の聞き手)にとってわかりやすい訳になり、同時に認知資源を節約する。「最初から日本語で書かれたかのような自然な日本語で」のような言い方がつまらないのは、翻訳の具体的な方法を何ひとつ与えてくれないからである。サイトラの研究は翻訳の方法に直結する。

6. サイトラの英語教育への応用について:リーディング指導への提案

6.1 はじめに

日本の英語教育においてリーディング指導で英文和訳が用いられているが、英文和訳の問題として、「英語の語順に沿って英文を読むことができない」(門田・野呂・氏木 2010)、「英文の内容が理解できていない」(卯城 2009)などが指摘されている。Communicative Language Teaching (CLT)の普及により、授業内でのコミュニケーション活動がますます重視され、日本語を介する英文和訳は否定的に捉えられる傾向にある。このような現状の中、近年、翻訳と通訳の復権を目指す教育運動である Translation in Language Teaching (TILT)の影響を受け(Cook 2010)、外国語学習において翻訳・通訳を用いた指導の提案がなされている。中でも、通訳訓練法の一つであるサイトラをリーディング指導の中で使用する提案がなされており、サイトラを用いることで、上述の英文和訳に関する問題について有効であるとの指摘がなされている(門田・野呂・氏木 2010)。そこで本稿では、通訳訓練法を用いたリーディング指導への提案を目指し、日本の英語教育におけるサイトラの扱いについて概観する。

6.2 英語教育におけるサイトラ

サイトラとは同時通訳のテクニックの一つであり、「原稿を見ながら即座に口頭で翻訳すること」(水野 2003)と定義されている。サイトラは音声情報を併用し、スピーチの原稿を冒頭から読み、チャンクごとにスラッシュを入れ訳していくことである。鳥飼(1997)は、サイトラは、音声を省くことで英語教育におけるリーディング指導に用いることが可能であると述べている。近年リーディング指導においても、サイトラを用いて指導することが提案されている(門田・野呂・氏木 2010)。

6.3 授業内でサイトラを使用する場合についての留意点

サイトラを授業内で用いる際には、以下の点について留意しなければならない。

a) 起点言語の品詞を無視して訳出する傾向

学習者は授業内では、起点言語の品詞と同じ品詞の目標言語で訳すよう指導される傾向にあり、一対一対応で訳すことに慣れている学習者にとり、サイトラは苦痛を伴う練習となる(瀧澤 2002)。瀧澤はサイトラを導入する前に、スラッシュ・リーディングを練習する必要があることを述べている。

b) 文法事項(関係詞節と強調構文)を訳出する場合

・関係詞節

サイトラをさせる上で、学習者は関係詞節の非制限用法と制限用法を訳出する際に注意が必要となる。授業では関係詞節の非制限用法と制限用法を区別して指導を行っており、門田・野呂・氏木(2010)は以下を例として挙げている。

例文:I have three daughters who are doctors. (制限用法)

I have three daughters, who are doctors. (非制限用法)

サイトラは直読直解を目指しているため、制限用法の場合でも、非制限用法のように訳していくよう指導していく必要がある(門田・野呂・氏木 2010)。

・強調構文

強調構文(it was A that...)の場合、that 以下から訳をはじめ、「that 以下は A である」と訳すよう学習者には指導がなされているが、学習者に「A が強調されるべきもの」としてサイトラする際に指導すべきであり、以下を指導例として挙げている(門田・野呂・氏木 2010)。学習者にサイトラさせる場合、日本語での意味との対応関係をはっきりさせることが重要である。

例文:Perhaps it was his brother who was sending the cards.

「ポストカードを送っていたのは、おそらく彼の弟だ」

→「弟だったのだよ。ポストカードを送っていたのは。」(サイトラ)

6.4 サイトラを用いた指導実践

越智(2005)により、高校生を対象に通訳訓練法(訳語の確認発音練習、ペアワークでの語句のクイックレスポンス練習、シンクロ・リーディング、スラッシュ・リーディング、サイトラ、シャドーイング)を取り入れた授業実践の効果を測るため、TOEIC スコアと英検準 2 級をもとに、学習者の英語力の変化について検証された。

通訳訓練法指導の対象

普通科特進国際コースに在学する高校 2 年生(33 名)が通訳訓練法を用いた指導の対象

であった。通訳訓練法指導前の学習者の TOEIC スコア(1 年次 3 学期、2004 年 2 月)は、平均 298 点(最高得点 455 点、最低得点 225 点)であった。英検準 2 級には 16 名の学習者が合格していた。

授業内で使用した材料

1 課が 700 語から 800 語で構成されている検定教科書『ワールドトレック II』を使用し、授業が行われた。1 課は 3 パートに分けられており、1 パートに 2 時間をかけ通訳訓練法を用いた授業が行われた。

サイトラを用いた指導の内容

本稿はサイトラに焦点をあてているため、越智(2005)で行われたサイトラの指導内容のみを概観する。

	指導内容
予習 1	<ul style="list-style-type: none"> ・授業で扱う課についての語彙・文法を調べさせた ・スラッシュ・リーディングをさせた ・センテンスグループ単位で文頭から訳出しノートに書き留めさせた
授業 1	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグラフごとに CD を聞かせた後、本文の内容理解を深めるため、日本語でその内容について発問した ・センテンスグループごとに文頭から訳出させて、文法と構文について説明した
予習 2	<ul style="list-style-type: none"> ・日英/英日一人通訳練習(サイトラ)
授業 2	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグラフごとに CD を聞かせ、英語でその内容について発問した ・ペアワークで英日/日英のサイトラをさせた

結果

2005 年 1 月(通訳訓練法を取り入れた 2 年次 3 学期)の TOEIC スコアの平均点は 369 点(最高得点 665 点、最低得点 200 点)であり、英検準 2 級には全員合格した。

まとめ

学習者の TOEIC スコアと英検準 2 級の結果をもとに、通訳訓練法の指導効果についての検証が行われた結果、その効果が見られた。しかしながら、越智(2005)による通訳訓練法を用いた指導実践では、サイトラ以外の通訳訓練法が用いられているため、実際どの程度、サイトラを用いた指導が、学習者の TOEIC スコアと英検準 2 級の結果に影響を及ぼしているのかは定かではない。

6.5 今後の課題

英語教育におけるサイトラに関する実証的研究は、十分に行われていない。上述の授業内でサイトラを使用する場合についての留意点を踏まえた上で、サイトラを用いた指導効果につ

いて検証する必要がある。

7. 通訳者養成訓練からみたサイトラ

7.1 はじめに

通訳の現場でサイトラ・スキルが求められる場面は少なくない。事前に原稿を入手している場合は、意味の単位ごとにスラッシュを入れたり、訳語を書き込んだり、あるいは、本番で原稿と異なる内容に変更される可能性があるとしても部分訳や全訳をした上で通訳に臨むこともある。本節では、1980年代以降の文献をもとに、通訳者にとって大切なサイトラの訓練が、日本の通訳者養成訓練の中でどのように定義され、実施されているのか論じることとする。

7.2 考察の対象—通訳訓練におけるサイトラ

考察対象は、第1に『通訳事典』、第2に通訳教本、第3に論文・実践報告である。主に英日の通訳者養成を目的にしている訓練をとりあげる。

7.2.1 『通訳事典』

当初、『The English Journal』の別冊号として出版された『通訳事典』には、通訳者養成プログラムの紙上講座が掲載されていた。その中で、サイトラがどのように扱われていたのか1981年から2002年までの主な記述を年代順に見ていく。松尾弑之が1981年に監修した第1号の紙面講座に「順おくりの訳 progressive sight translation」と呼ばれるサイトラが取り上げられていた。「一般に『頭ごなしの訳』とも呼ばれているもので、文章を初めから順に理解しながら、文章の完結をまたずに訳を始めるという訳出の方法です」と記されている。1982年にも担当した松尾は「目で追いながら次から次へと順送り訳出」するため、“progressive”と表現したと説明している。1983年の講座を担当した浅井達夫はサイトラを通訳の現場で習得すべきスキルと捉え、「ベテラン通訳者と組んでやさしいところ、すなわち前もって原稿が渡されている部分」を現場で担当させてもらうようにと指南している。

1992年の『通訳事典』で大谷立美はサイトラを「英文を読み、内容を理解すると同時に訳し始めることである」と説明し、「です・ます」調の敬体を使い、情報単位ごとにスラッシュ入れ、『要するに』といった言葉で、上手に続けていってみよう」と説明している。馬越恵美子は1993年に「スピーカーが原稿を読みながら話す場合に、通訳者も同じ原稿を事前に入手して、原稿を目で追い、耳からはスピーカーの声を聞き、原稿どおりに読んでいるかチェックしながら通訳（ほとんどの場合同時通訳）すること」と定義づけている。日英の文章構造の違いから、語順を変えての訳出が必要になると指摘し、「主語:<>」、「動詞:」など印をつけ、文構造を把握したうえでの訳出指導をしている。1994年に理論をふまえて解説した染谷泰正は「あるまじった英文をスラッシュ・リーディングしながら、スラッシュを入れるごとにそれぞれのセンスグループを頭から訳していくという読み方」とし、さらに「原稿付きの同時サイトラがうまくできるようになれば、本格的な同時通訳のための準備はほぼ完了」と論じている。水野的は1995年にサイトラは「書かれたテキストを目で見ながらその場で訳していくこと」とし、サイトラを「通訳の初歩的な訓練」と「通訳の現場で要請される本格的なサイトラの練習」の2段階に分類した。初歩的

な段階では、順送りに訳出しながらも「原文の展開に応じた柔軟な訳を、声に出し練習する」ことを求めている。原稿付き同通の準備にあたっては馬越と同様に印の活用を勧めている。1999年に再び講座を担当した馬越は『見て聞いて話す』という3つの作業を同時に行うというのは、日常生活にはあまりない不自然なことである」としサイトラ訓練の必要性を説いている。2000年に新崎隆子は伝統的な訓練手法の代表としてシャドーイングとサイトラをあげ、サイトラは「文章を頭から順に理解して訳出する技術」と記している。2002年に再び担当した水野はスラッシュ・リーディングとの違いについて、「サイトラは理解した文を『より完成度の高い訳』にすることを目標にしています」と説明し、サイトラは「同時通訳の準備練習」にもなると論じている。

7.2.2 通訳教本

続いて2016年現在も入手可能な通訳教本で扱われているサイトラ訓練をみていく。『グローバル時代の通訳』(2002)では、サイトラを「通訳の極めつけ」と表現し、「同時通訳の場合は、耳から自然に聞こえてくる音を、通訳者が『聞く』作業から入ります。しかし、サイトラの場合は、通訳者が自分の力で文字を音声認識するという余分な作業が入ります」と指摘している。

『通訳の技術』(2005)では、サイトラの章を設け、逐次・同時通訳両方で使用され、「スピーカーがあらかじめ用意された原稿を読む場合の通訳」であり、現場では多用されていると説明し、直前に原稿が入ってきた場合、「通常の同時通訳より難しい」と指摘している。具体的なサイトラ方法としては語順マークなどをつけるよう指導している。現場に必要なスキル以外に基礎訓練としてのサイトラ訓練の意義について言及し、さらに「同時通訳への移行段階での訓練としても、サイトラは貴重だ」と論じている。

『英語通訳への道』(2007)では、通訳への基礎訓練の中で「スラッシュ・リーディング」を扱い、本来、原稿つき同時通訳の意味で使われているサイトラではあるが、「本書ではスラッシュ・リーディングと同義語と考えてください」とことわっている。主な目的・効果として、「文の構造と意味の把握力・訳出力強化」をあげ、訓練方法は「①意味の単位ごとにスラッシュを入れ、目で文を追いながら、理解を積み上げ、文末で文意の理解を完結する。②同時通訳につながるために訳出の工夫をする」と解説している。

7.2.3 論文・実践報告

(1) 大学・大学院通訳クラスで扱うサイトラ

大学や大学院の通訳クラスでは将来通訳者を目指す学生も対象にしていることもあり、ここで取り上げることとする。内藤(2009)は大学院の通訳コースで講演会の通訳実習の準備を進めるにあたり、スピーチ原稿が予め用意されている場合は、授業内外で、サイトラに取り組み、備える学生も多いと論じている。稲生・河原・溝口他(2010)では、大学を中心とした通訳学習者を語学習熟度別に「入門」、「初級」、「中級」の3レベルに分類したが、すべてのレベルでサイトラ訓練に取り組んでいることが明らかにされている。

(2) コミュニティ通訳教育で扱うサイトラ

大学院の司法通訳翻訳の実習授業について報告した西松(2003)は、司法通訳の現場では「読み聞け」とも呼ばれるサイトラが使用されている事例を紹介しながら、サイトラは「通訳技

術の中でも最も難しい」と評価している。堀(2006)は、大学院の医療通訳クラスの通訳実技において医療機関で実際使用される書類などを使って、サイトラ訓練に取り組んでおり、通訳実技時間の3割近くがサイトラ訓練に費やされていると記している。穴沢(2012)は、医療通訳トレーニングの中でサイトラ訓練が導入されている事例について記している。コミュニティ通訳者養成に取り組んでいる水野(2015)は通訳者に「メモ取りを伴う逐次通訳、ウispキング、サイトラなど、通訳を行うのに必要なスキルを持っていること」を求めている。コミュニティ通訳では書類のサイトラを行うこともあり、他の通訳分野以上に独自のサイトラ・スキルを確実に習得することが求められているのかもしれない。

7.3 まとめ

『通訳事典』や通訳教本では、通訳経験がある執筆者を中心に、自らの経験を踏まえながら解説している事例が多数みられた。他方、日本における通訳研究の本格化に伴い理論的な枠組みを踏まえた上での記述が増えている点が観察された。本研究では、主に次の3点が確認された。

- ①通訳者養成訓練において、サイトラが通訳の基礎訓練および通訳現場で必要なスキル習得の目的で導入されている。
- ②順送りの訳だけでなく、語順を変え柔軟に訳すという考え方がある。
- ③サイトラにはスラッシュ・リーディングや原稿付き同時通訳も含まれることがあり、定義は多様である。

同時通訳よりも難しいとも評されていた原稿付き同時通訳の訳出戦略や、通訳者養成の基礎訓練としてのサイトラの効果に関する研究など、通訳者養成の視点からサイトラ訓練に関して取り組むべき研究テーマは多い。今後の研究の深化が期待される。

8. おわりに

本稿全体は研究会で行った発表に基づいて加筆修正した論考である(各論考間での整合性については最低限に留め、掲載順序は研究会での発表順)。このようなプロジェクト・メンバー6人の論考は、今年度のサイトラ研究プロジェクトの活動成果を示している。今年度の活動では、通訳・翻訳・英語教育におけるサイトラの可能性を具体的に提示することができたと考える。とはいえ、現時点では、統一的な結論にはあえて踏み込んでいない。今後の研究の可能性を探るという段階であり、拙速な結論を導く必要はないであろう。

また、本プロジェクトでは研究会とは別に、サイトラに関する文献収集も行った。そして本稿は、2015年度に提出した申請書の活動計画で掲げた「国内外のジャーナルや会議で発表を行うなど、本プロジェクトの目的に沿った発表活動」の一環である。次年度もプロジェクトを継続する予定であるが、関心を共有する会員とも連携しながら、さらなる研究を着実に進めたい。

.....
【著者紹介】(執筆順)

長沼 美香子 (NAGANUMA, Mikako) 「サイトラ研究プロジェクト」代表者。神戸市外国語大学准教授。『訳された近代』(近刊)、『日本の翻訳論』(法政大学出版局)ほか。

連絡先: mikakonaganuma@inst.kobe-cufs.ac.jp

石塚 浩之 (ISHIZUKA, Hiroyuki) 広島修道大学准教授。Repetitive translation and conceptual processing in SI. (2012) 『通訳翻訳研究』第 12 号など。

船山 仲他 (FUNAYAMA, Chuta) 神戸市外国語大学学長。「通訳するための思考」(2012) 『通訳翻訳研究』第 12 号、『同時通訳における概念化過程の検証』(科学研究費補助金研究成果報告書: 課題番号 17520272) など。連絡先: funayama@inst.kobe-cufs.ac.jp

水野 的 (MIZUNO, Akira) 青山学院大学教授。『同時通訳の理論』(朝日出版社)、『日本の翻訳論』(法政大学出版局)ほか。連絡先: a-mizuno@fa2.so-net.ne.jp

辰巳 明子 (TATSUMI, Akiko) 広島商船高等専門学校講師。「大学英語教育における翻訳指導に関する研究: 一般英語授業での翻訳指導実践を事例として」(2015) 『通訳研究への招待』第 13 号ほか。

稲生 衣代 (INO, Kinuyo) 青山学院大学准教授。専門は放送ジャーナリズムにおける通訳翻訳、映像翻訳、通訳教育。

.....
【参考文献】

Agrifoglio, M. (2004). Sight translation and interpreting: A comparative analysis of constraints and failures. *Interpreting* 6 (1): 43-67.

アルク編『通訳事典』アルク (本稿では 1981, 1982, 1983, 1992, 1993, 1994, 1995, 1999, 2000, 2002 の各号を参照)

穴沢良子 (2012) 「医療通訳トレーニングの実践と評価: アクション・リサーチ実施計画」 『通訳翻訳研究』第 12 号: 263-274.

Čeňková, I. (2010). Sight translation. *Handbook of translation studies*, volume 1: 320-323. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

de Vasconcellos, M. H. (1992). Text and translation: The role of theme and information, *Ilha do Desterro* 27: 45-66.

Cook, G. (2010). *Translation in language teaching*. Oxford: Oxford University Press.

Diaz-Cintas, J. (2010). Subtitling. *Handbook of translation studies*, volume 1: 344-349. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

- Espindola, E. (2012). Systemic functional linguistics and audiovisual translation studies: A conceptual basis for the study of the language of subtitles. *DELTA* vol. 28.
- Firbas, J. (1999). Translating the introductory paragraph of Boris Pasternak's *Doctor Zhivago*: A case study in Functional Sentence Perspective, In G. Anderman & M. Rogers (Eds.), *Word, text, translation*, 129-141. Clevedon: Multilingual Matters.
- 船山仲他 (2012) 「通訳するための思考」『通訳翻訳研究』第 12 号: 3-19.
- Gile, D. (1995). *Basic concepts and models for interpreter and translator training*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Halliday, M.A.K. & Matthiessen, C.M.I.M. (2004). *An introduction to functional grammar, 3rd edition*. London and New York: Routledge.
- 堀朋子 (2006) 「大学院における医療通訳教育とその課題: 大阪外国語大学大学院の取り組みからの考察」『通訳研究』第 6 号: 155-173.
- 稲生衣代・河原清志・溝口良子・中村幸子・西村友美・関口智子・新崎隆子・田中深雪 (2010) 「日本における通訳教育の課題と展望」『通訳翻訳研究』第 10 号: 259-278.
- 小松達也 (2005) 『通訳の技術』研究社.
- Lambert, S. (2004). Shared attention during sight translation, sight interpretation and simultaneous interpretation. *Meta* 49 (2): 294-306.
- 水野的 (2003) 「サイトラ」小池生夫・河野守夫・田中春美・水谷修・井出祥子・田辺洋二(編)『応用言語学辞典』研究社.
- 水野真木子・中林眞佐男・鍵村和子・長尾ひろみ (2002)『グローバル時代の通訳』三修社.
- 水野真木子 (2015) 「愛知県犬山市のコミュニティ通訳者養成および派遣のためのシステム構築について」『金城学院大学論集(社会科学編)』第 11 号 2 巻: 72-79.
- 内藤稔 (2009) 「通訳実務能力涵養に向けた実習指導方法の考察」『東京外国語大学論集』第 78 号: 107-122.
- 日本通訳協会(2007) 『英語通訳への道: 通訳教本』(改訂版) 大修館.
- 西松鈴美 (2003) 「司法通訳翻訳人訓練の方法論」『通訳研究』第 3 号: 103-121.
- 越智美江 (2005) 「高校における通訳訓練法を取り入れた言語教育の効果と展望」『通訳翻訳研究』第 5 号: 203-224.
- Shreve, G. M., Lacruz, I., & Angelone, E. (2010). Cognitive effort, syntactic disruption, and visual interference in a sight translation task, In G. M. Shreve and E. Angelone (Eds.), *Translation and cognition*, 63-84. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Slobin, D. I. (2003). Language and thought online: cognitive consequences of linguistic relativity. In D. Gentner & S. Goldin-Meadow (Eds.), *Language in mind*, 157-191. Cambridge, MA: MIT Press.
- 瀧澤正己 (2002) 「語学教科法としての通訳訓練法とその応用例」『北陸大学紀要』第 26 号: 63-72.
- 鳥飼玖美子 (1997) 「英語教育の一環としての通訳訓練」『言語』第 26 号: 60-66.
- 卯城祐司 (2009) 『英語リーディングの科学:「読めたつもり」の謎を解く』研究社.

- Viaggio, S. (1992). The praise of sight translation (and squeezing the last drop thereof). *The interpreter's newsletter* 4: 45-58.
- Viezzi, M. (1989). Information retention as a parameter for the comparison of sight translation and simultaneous interpretation: An experimental study. *The interpreters' newsletter* 2: 65-69.
- Viezzi, M. (1990). Sight translation, simultaneous interpretation and information retention, In L. Gran & C. Taylor (Eds.), *Aspects of applied and experimental research on conference interpretation*, 54-60. Udine: Campanotto.